

PASSION

人生をゆさぶる II

永田 円了

Life is a daring adventure or nothing

日常をマクロで見れば、とりたてて目立つこともなく、ありきたりの出来事の連続でも、ミクロで見れば、刻一刻を感じたり考えたり、人の意識は変幻きわまりない動きに満ちている。実は何も起こらない平凡な日常などありあない。否応なく何かが起こっているのである。

ゆるやかに流れる日常、ある日突然何かに気づく。“人生をゆさぶる”には、必ずしも大事件を必要としない。日常のちょっとした気づき、それによって意識が変わり、行動が変わる。養老孟司氏は次のように提案する。「違う土地に行って、違う空気を吸う。人間そうやって自分を変えていく。相手が変わるのではなく、自分が変わる。自分はずっと同じ、と思っている人が多いが、それは違う」つまり周りの環境を変えることで“人生をゆさぶる”、人の変容を可能にしようとするのである。



なぜアメリカの鉄道産業は衰退したのか

20世紀初頭、アメリカは世界一の鉄道王国であった。1916年には、総延長41万キロという、気が遠くなるほどの鉄道網を整備した。しかしその後、鉄道は74.3%（1930年）から、45%（1960年）にまで落ち込んだ。

飛行機や車が普及したからか。またアメリカは国土が広いから鉄道が発達しないのか。しかるにヨーロッパ各国は今も鉄道網でつながっている。シベリア鉄道はかなり長距離であるが、衰退しているということはない。

元ハーバード・ビジネススクール教授・セオドラ・レビット氏は鉄道衰退の理由を、次のように分析する。「彼らが、彼らのビジネスを間違えて定義してしまったからである。彼らの定義は、輸送機関志向ではなく、鉄道志向であった。それはつまり、顧客志向ではなく、製品志向だったということである」。つまり、鉄道会社が自分たちのことを、「鉄道会社」と認識したためである。



「岡本太郎」という人物

芸術は爆発だ！で知られる昭和の奇才、岡本太郎。唯一無二の世界観で生み出される数々の作品は、見る人を驚かせ、引き付けた。その原点は、驚くほど特殊な家庭環境にあった。

父一平は漫画家、母かの子は歌人で小説家のまさに芸術一家であった。父一平は成功すると放蕩し、一方、かの子は愛人を家に連れ込み、家族と同居させていたという。そんな家庭で育った太郎は、幼い頃から、“子どものくせに”と、言われたことは一度もなく、両親とは、

人間同士として、まったく対等の関係だったという。

この自由奔放な環境は太郎に多大な影響を与えた。「自分に忠実に生きたい、なんて考えることは、むしろいけない」「本当に生きていくためには、自分と闘わなければダメだ」。

自分を固定化しない生き方、“人生をゆさぶり続ける”意識を芸術で表現した岡本太郎。この人物を総括するなら、「火事場の馬鹿力」を、どの瞬間にも意識し実践した男、ということになるのか。

<事例>

矢沢永吉／人生はゆさぶり
数学者・森 毅／常識から外れたことをするのが若者
「人生をゆさぶる」若者たち・1969、新宿西口地下広場
なぜ米国の鉄道産業は衰退したのか、
ロナルド・ハイフェッツ教授「なぜ専門家が失敗するのか」
岡本太郎／型にはまらない生き方を実践『自分の中に毒をもて』
綾小路きみまろ／笑いによる“ゆさぶり”
片岡鶴太郎／人生をゆさぶり続ける生き方
養老孟司／「学ぶ」とは、自分が変わること
黒澤明作品 1952年『生きる』人生が大きく揺さぶられるとき、
歌・シャーロット・ケイト・フォックス『 Gondola's Song』

円了のホームページ: www.enryo.jp

